

辨榮聖者
光明大系

難思光
無稱光
超日月光

光明大系

難思光・無称光・超日月光

卷頭お写真説明

- (1) 辨栄聖者尊影 大正九年十月 京都市知恩院勢至堂別時にて
- (2) 超日月光仏
- (3) 細字観音菩薩図



光明大系

難思光・無称光・超日月光

卷頭お写真説明

- (1) 辨栄聖者尊影 大正九年十月 京都市知恩院勢至堂別時にて
- (2) 超日月光仏
- (3) 細字観音菩薩図

光乃ろろし 今も身も

思くもま

日月此

智志乃

韶日月光佛

佛地神那寫字



つとむ 空

儀

三業四威

聖意攻 己の意と

光明大系

難思光・無称光・超日月光

卷頭お写真説明

- (1) 辨栄聖者尊影 大正九年十月 京都市知恩院勢至堂別時にて
- (2) 超日月光仏
- (3) 細字観音菩薩図



佛說高王白水觀音經
般若心經

釋解孫行書

光明大系
辨榮聖者

超無難

日稱思
月

光光光

難 思 光

甚深難思の光明を至心不斷に念ずれば信心喚起の時いたり心の曄曠(あ)とは成ぬべし

無 稱 光

如來の慈光被むれば七覺心の華開らき神祕の靈感妙にして聖き心によみがえる

超 日 月 光

智悲の日月の照す下光の中に生活す身は聖意を己が意とし三業四威儀に行爲なり

光明生活の三階

信仰の生活光明の生活には三階があります。初めは喚起の位で、自分の心の中に信仰心を喚起する位であります。之を信仰の生活とも光明の生活とも申します。喚起は喚び起すのでありますから如來の方から云へば難思光とも申します。何故かと云へば初めは信仰の光明と言つても何様なものか眼に見えませぬから分りませぬが、太陽の光が段々明るなつて来て何となく難有い楽しいやうな状態になつて来るやうなものであります。信仰が出来ますれば楽しんで働くことが出来ます。其の如く信仰の光明も一方に道理に明るい道理となり、一方には何となく有難いものとなり、御恵み御慈悲を受けますと感謝の意を以て働くことが出来ます。それ等が光明生活の状態であります。それを喚起せず、或は光明と言つても有り難いと云ふのはどんなものか一向氣が付きませぬから難思光であります。

いかに信心を喚起するかの因縁を述べれば、即ち因性又種因に遠と近との二因あり。遠因と近因は心地である。遠因とは一切衆生悉有佛性として個々皆佛となることが出来る佛性と云ふ心田地をもつて居

る。然るに此心地がほしまゝにして置くとは煩惱と云ふ我儘な雑草が生ひ繁つて心地が瘦せて仕舞つて居る。例へば土地にても雑草が生ひ繁つて居るのはもと土地が龜惡と云ふではない、否還つて沃地程捨て置く時は惡草が繁蔓る其如く人は煩惱が強いから惡人と云ふ譯ではない。佛性の良田をはし無く捨て置く爲めに我儘な煩惱に荒れ果つるのである。其心地を開拓して好種因を播布して立派な靈格と云ふ好結果を爲すのが目的である。

信心の開拓は懺悔

先づ信仰を得て靈の生活に入らんと欲する順序としては現在の我は罪惡である汚れと苦と罪とをもつて居ることを自覺し、此我儘なる雑草を除去せねばならぬ。こゝに自己の業障深重なるを感じて苦悶が起る。然しながら自己の罪惡であることは何分かの光に接して初めて己は罪惡と感じらるゝのである。

喚起の因縁

人の佛性は奥に潛んで居るのが遠因として、而して宿因が近因と爲る其れは即ち世間で云はゞ遺傳素質である。各個々悉く其資質が同じ事ではなく、例へば植物の種を播布するに其土地に適當せる種類

は繁殖し易きが如く、人に惡に感染し易きと又善に薰習し易きとあり。硬地に蒔ける種は收穫少く沃地に播けるは收穫繁きが如し。

初めて信仰にはいつて罪障懺悔と云ふことを言ひますが氣儘の草を取除いて行くことであります。そうしますと凡夫の自性は佛性となる性質を持つて居るのである、人間の本來は善いものであるから善い心を持つて居りながらそれを棄てゝ行くから罪惡になります。

佛の種を蒔いて行く。こつちは自性でありますから蒔きさへすれば段々善い實を結ぶことが出来るのであります。それが因であります。如來から受けました本性がありますから如來の境涯に入ることが出来るのは同じ事でありますけれども長い間の習慣で遺傳とか或は宿因とかで宗教に遠い人があります。同じ種子を蒔きましても石地に蒔けば收穫が取れませぬ。良い土地に蒔けば收穫が多いと云ふやうなわけで、信仰に區別があります、それが即ち性でございます、人間には何れも淨土と云つて何だか知らぬが難有いものが宇宙にあると云へば、さう云ふやうに思はれる性を持つて居ります。それを助けるのが縁であります。「佛種は縁より起る」と言ひます。

近因と云ふのは自分の方の自性を以て段々進めて信仰を植付けて行くのであります。木があり火が

あり、木は火を附けると燃える性を有つて居ります。火を附けなければ燃えませぬ。どなたでも信仰の火が移りませぬと信仰になりませぬ。宗教と云ふものはつまり理屈ばかり聽いて居ります者は理屈ばかり覺へて本當に活きた信仰がありません。活きた信仰は例へて言ひますと我々は燃へる性質を持つて居るから先方の火を附けるのであります。こつちの信仰が薄いと線香の火であります。何だか難有いと思へば有り難いやうである。線香の火を以て生木に火を附けやうとすると火が消えてしまふけれども、烈火のやうな信仰を持つて居ると、法然上人や弘法大師の如く直ちに焼いてしまふ。智慧に火が附いてくるから自然明るくなる。

さてどう云ふもので信仰を養ふかと云へば五通りあります。資糧即ち養ふ食物であります。禮拜、讀經、觀察、祈念、讚美であります。朝夕自分の眞心を以て拜禮します。爾うして自分の眞心が先方に行つてしまうので、禮拜するのは丁度食物を食べるやうなものであります。食物にしましても此時分には味も何もありませぬ。我々の身體でもそうです。母の胎内に居る時は別に口で乳ばかり呑むわけではありませぬ。母の養分が廻つて行くのであります。味も何もありませぬ。禮拜しなさいと親が云ふことは丁度胎内で養はれて居るやうなものであります。それが段々大きくなると味が分つて來て

食べたいやうになります。信仰の養分も其の通りであります。そこで朝夕の禮拜でも又お經を讀みますのも、之は開導と申しまして、釋迦さんが實驗せられた事を説いてあるのでありますから之を讀みますと極樂は斯様なものであると段々其方に導かれて行くのであります。觀察は三昧に入つて行きますと曇がなくなつて行きますから自分の心に靈界の光明が感ぜられて來ます。祈念して南無阿彌陀佛と稱へるのも我を救ひ給へ我に食物を與へ給へと云ふやうなものであります。讚美歌を唄つて祈るのも佛教にも澤山あります。それを歌ひますと知らず／＼天國に參ります。是だけでも始終心の中で用いて居りますれば自然に明るくなつて來ます。

南無阿彌陀佛と祈れば恵みの乳汁を戴くのであつて、それで靈性が育ちます。養分であります。資糧であります。

どう云ふ風な階級になつて行きますかと云ひますと、信仰の種子を蒔いて行きますとそれが信仰の根になつて佛になる精分をもつて居りますから、一番の種子となりますのは、南無阿彌陀佛と稱へますと、阿彌陀と云ふのは佛である、それを種子にする、さうして養つて行く。恰も大きな杉の實であつても蒔いて直ぐ枝はありませぬが毎日養つて行くと根が出て枝が出て大くなるのであります。南無阿

彌陀佛と云う時は根も葉もありませんが養つて行くと、元來が如來の本體になるべき性質を持つて居りますから成佛することが出来ます。信念のない信仰は發達しません。成る程理の詰つたものであると云つても信仰しなければなりません。さうして禮拜をし讀經して養分を取るのであります。種子を蒔きませぬといくら禮拜をしましても役に立ちませぬ。種子さへ蒔けばいいには根が生へて來ます併しそれを疑ひますと根が生へませぬ。如來の光明は何か分らぬが心を其方に用いて居ります中に自分の心に成る程と云ふ感覺を現して信仰の芽生をするのであります。

何だか知らぬが目があいたやうな心地になる。それが夜明けである。植物に譬へてみれば初め蒔いた種子に佛様の芽が出て來るのである。人間なら初めオギヤツと生れたやうなものである。何だか知らぬが自分が活きた信仰に生れて來るのである。成るほど光明と云ふものは目に見えぬが、信仰の夜明けになつて心に其の感がついて來る。かすかに靈光に觸れたので之が喚起の位である。

次は開發の位である。植物で云へば丁度花が開いたやうなもので、こゝに五根五力と云ふものがある。信仰の根が出来て開發して花が咲くやうなものである。人間なら生れ出て漸次大きくなつて之から結婚しやうと云ふ時である。本來の面目に何となく接したい靈界の火に接したいと、信仰が開發す

ると、丁度結婚して同棲するやうに大なる靈と自分とは離れやうがない。全く靈性が開發して信仰の恵みを得たる美味と快樂とは其工合は言語で云へぬ冷暖自知である。無稱光、口に云ふことが出来ぬ。花の開くの如く雌蕊雄蕊が働をする如く、我々の靈性と如來の靈性と合致するのがそれと同じである。

擇法、精進、喜、輕安、定、捨、念の七覺支がある。念佛三昧が深く精神にはいつた人は此味が分る。ちよつと感じ難いでしやうが自分の精神と如來と一になるのである。弓を習ふにも的の方に精神をこめてやるのである。的を大きくすれば百發百中だしやうがそれでは弓の稽古ならぬ。自分の方から直して行く。三昧とは自分の一心と先方の的とが一緒になるのである。人の心は往來する。「日中とめどなしに働いてゐる。さう云ふ心を纏めてみたいと心を用いるのである。それを擇法と云ふ。精進と云ふのは精神を注ぐのである。一心一向になると耀く方面に進んで行く。さうすると（一）幽かに湧出して来る、深く三昧に行けば邪念がなくなる、純粹の精神が湧出して来る。喜は何となく喜を感じる。もう少し深くなると輕安となる。佛様に乗つてしまふ私を忘れてしまふ。何となく身體が安々と有るか無いか分らぬやうに感ずる。世界の極樂に向つて行くのである。人は安かになつて輕く

して置くべきものを自分の心の中に種々なものを持ち込んで苦しむのである。自分の心一つを守つて行けばよいのに他人の事まで拾ひ込むから堪へられぬ。東京の人で至つて氣が短い人があつたが一心に念佛して三日目になると何だか知らぬが何も心がなくなつてしまつたやうに思つた。こんな心地は生れて始めてであると云ふことである。之を輕安と申します。それから定と云ふのは佛と我と一體になるのである。即ち禪定である。月を見てゐると我が月か月が我かわからなくなる。自分の心か佛の心か分らぬやうになつたのが定である。捨と云ふのは初めて注意して居らぬと何時の間にか離れてしまふ。段々しまひには丁度弓を習ふやうなもので慣れて來ると先方を見ないでも定つていつでも的中。それと同じことで佛といつても離れぬのである。例へば字を書く時手本を見て書く時は其の通り書いて居るが手本を離れると書けぬが、それが純熟してくるとわき目でも書くことが出来る。大砲でもさうである、熟練すると話ししながら心持よく中るやうになる。それが捨である。念と云ふのはすつかり染み込んでしまつたのである。自分の心に佛が飛び込んでしまつたのである。布と藍は別物であるが染み込んで來ると藍と一緒になつて來ると同じことである。自分のものか先方のものか別けやうと思つても別けられぬと云ふやうなもので、こゝに來たのが開發した姿である。

次は體現位である。光明中の人となつて何の爲めに光明を受けたかと云へば、丁度何の爲めに電氣をつけたかそれは働く爲である機械を運轉させる爲めであると云ふやうに自分の心の本來の電氣力は彌陀の十方遍照と同じく何處へでも充満して居る。それで如來の電氣は自分のものになつて來る。有り難いから働く力がある。電氣と同じことである。信仰がないと電氣がつかぬが明るくなると力となり運轉する力となる。

光明生活

有餘涅槃

理想的淨土

無餘涅槃

實在的淨土

第三階の信仰。既に光明を獲得して光明中の人となると、我々の方から受けた光明を自分の身口意、身で行ふ口に言ふ心で思ふことの働に現はすことである。受けし光明を現に現はして來ることである。光明生活の體現と云ふのは如來の思召が自分に實現せらるゝことである。それを如來の方から云へば日月を超へて居る光、超日月光である。動物植物地球上にあるものは太陽の光の下に生活して行くがそれがなければ生きて居られぬ。信仰にはいらぬ人は靈的生活が出來ぬ。光明生活に入つても

小さい大きいがありまして、弘法大師法然上人の如くには働きが出来ませぬが、自分としては自分だけの働きをすれば宜いのである。電氣でも百燭も五燭もある如くで、人々器だけに受けて居るだけに働きに現はれて来るのである。それが靈的生活である。

體現と云ふ働きに付いて十善或は八正道がある。十善と云ふのは、身と口と意の中に身に於て殺生しないとか、盗まぬとか、奸淫せぬとか。かく身に於て三、口に於て四、意に於て三である。十善の裏は悪である。それをなくして行くのが不殺生不邪淫不盜、それから口に於ては妄語、綺語、惡口、兩舌、虚偽(虚)を云ふそれが光明の中にはいりますと自然虚偽を云ふことがない。此十善を保つに二通りあります。十戒を戒法として保つて行くのと、信仰によつて行ふのと違ひます。戒法には勿れと云ふ字が附く、之を犯すといかぬと制止して行くのが戒法で保つて行くのである。光明中の生活で行くのは、勿れと云はぬでも殺すことは出来ぬ。盗まうと思つても光明中に盗まれぬ。奸淫しやうと言つても出来ぬ。虚偽を言ふと云つても光明中では言へぬ。綺語と云ふのは飾り語であります。如來の光明中の心でない虚偽は言はぬ嘲弄することは出来ぬ。兩舌は二枚舌を使ふ、それが光明中では使へぬと云ふやうになるのが信仰がよくできた姿である。戒法と信仰とはそれだけ違ふ。戒法は保たねば

ならぬ。信仰では、ならぬと云ふのではないが自分で出来ぬやうになるのである。

八正道(八正道)とは正見、正思、正語、正業(正業)、正命(正命)、正精進、正念、正定(正定)と八道がある。悪と邪とは、悪は形の上にあらず。精神の内面に持つて居る悪を邪と云ふ。其反対が正である。善と云ふは形の上に現はれるもので、精神的に善いと云ふのが正である。それに八正道がある。光明生活に入れば、善と云ふは小さい。正である。

正見は量見である。自分の見込である。量見が正しければそれから正が出来る。正思と云ふのは其場／＼の正しい考である。量見が悪いと正しい考はしない。正語と云ふのは口で言ふことが正しい眞理にかなふ言語である。正業と云ふのは行爲である。見が正しければ如來の思召にかなふ行動をなす。正命と云ふのは生活である。たとひ他人の物を盗んでも食べさへすれば生きて居られるがそれでは正命ではありませぬ。正しい生活ではありませぬ。渴しても盜泉の水は飲まずで正しい生活をしなければならぬ。正精進、之は勵んで仕事をするのである。正しく働いて行くのである。正念と云ふのは、正しさが自分の心に浸み込んで習慣性となつて其場々々で考ふるのではなく胸の中に感じ出て來るのである。(註—原文中斷) 正定は、自分の心の統一が出来まして亂れぬことである。智慧で自分の行

爲に就いて斯う云ふことは悪い善いと辨別することが出来る。それらが光明中の生活である。之が細かに覺えて居られずとも信仰が其點に行けば自分の心に浮んで来るのである。

終に臨み皆さんが其一部でも御受けになれば受けただけの光明の働きが出来て来るといふことに就いてお話しませう。三階級に別けてありますが、こゝまで行かなければ出来ぬかと云へば一應は階級を擧げたが其一分でも受ければ氣がついてみれば一分の光明があります。之を斯う云ふ風に行くのが道であると云ふことが氣がついてくる。それが光明である。そう云ふ風に感じて進めば實行の上にはあらはれて来る筈である。心の中に受くれば、働の上に表れて来る。光明中に入りし人とまた受けぬ人は自然々々に異つて来る。

かりに日本歴史上で光明を受けし人と受けぬ人との御話をしますと、織田信長、徳川家康の如きは最有名である。家康公は戦争の中に居ても念佛を稱へぬことはありませぬ。兩大將が武田勝頼を相手に天目山で戦ひ武田勝頼が討死して首實驗の時、織田信長は勝頼の首を睨んで唾を吐きかけ、おのれ勝頼おのれの如き分齊を以て抵抗するとは不届な奴だと足蹴にした。然るに今度は家康公の實驗に供へたるに、家康公は戦争に出たる時も毎時も阿彌陀如來を離れることはない。勝頼の首級を持つて來

ると云ふことであつたから燈明を如來に捧げ待つて居て、持つて來た首級を先づ阿彌陀如來の前に出して、敵となり味方となるのも過去の因縁で仕方がない。併し斯様になつたら仇怨はない。一切平等であると云つて、念佛を稱へ勝頼の菩提を弔つたと云ふことである。さて此兩將の結果はどうなつたかと云へば織田信長は京都の本能寺で股肱と頼む明智光秀に弑せられた。

然るに家康はどうかと云へば、戦争ばかりであつた世を太平の御代にしたのが家康の功である。家康は自分の敵に對しても同情の涙にくれ未來までも弔ふと云ふのはどう云ふわけかと云へば、家康は三河で生れたが、(三河に大樹寺と云ふ寺に寶物になつてゐる本があつてそれを見ると、斯う云ふことが書いてある。) 徳川家康が十九歳の時、其頃は松平元康と言つて居たさうで、今川義元の幕下であつて大高の城を守つて居たが、今川義元が織田信長と戦争することになり桶狭間で義元が討死した。其時元康も切腹する積りで家來に暇をやつて三河の大樹寺にやつ來た。其時の寺の上人が登譽上人で、今川義元の戦死を聞いて自分の檀家たる松平元康も落ちて來るだらうと心待ちに待つて居たさうである。すると五月の十九日の夕刻に果して家康がやつて來た。門を叩くから開いて見ると其時初めて會つたのが家康で、自分は之から切腹する積りであると云ふのを、上人はそれは違つた心得であ

る、死は易し生は難し、生存へなさいと意見をし、それにしてもお尋ねする事がある。十六歳の時初陣になつたと云ふがどう云ふ心を以て戦争をされたかそれが承りたい、と云つたら、自分は武士であるから首級一つも餘計に取りたい城も取り國も取つて天下を掌握したい、さうして之を子孫に譲つて名を末代にのこしたいのが戦争する心の持ち方であると言つた。上人は、他人の首級を取ると云ふことは強盗であると云つたら、家康は成る程首級を取ると云ふのは盗むやうなものであるが之は武士の習ひ仕方がないと云ふ。

上人はイヤ／＼さうではない。土農工商悉く自分々々の受け持を以て國家の爲に働いて居る。百姓にしても自分の食ふ米さへ取れば宜いと云ふのではない、國家の人の食物を作るのが農家の勤である。職人でも其の通り大工が自分の家さへ建つれば宜しいと云ふものではない。商人でも自分の着る着物ばかりではない天下の人の着る衣服を賣るのである、それが自分の勤めである。天地萬物悉く如來様から命ぜられた所の勤がある。此世も治める者がなければ強盗が横行して良民も其職分をつくすことが出来ぬ。それを平定して四民安堵するやうにやつて行くのが武士の務であるから自分の爲めではない、天下の爲めである。頼朝が覇府を鎌倉に開いても自己の爲めに働くと言ふ心であるから、頼

朝より偉い人が出ると其者に取られてしまふ。天下の爲めになると云ふ心であれば敵はない。それが天から受けた務めである。菩薩の修行をするのでありますと懇々と説き聽かされた。家康も大に感じまして自分もさうしやうと決心し、上人より念佛の道を授かつて一生念佛した。

白露をとめおく夜にはをみなへし

一としほ色のそひまさるらん

—
聖者